

歴代寶案 校訂本 第四冊

目次

グラビア	
教育長挨拶	
目次	
凡例	
第二集	
卷一五（雍正三年～雍正五年）	1
卷一六（雍正六年～雍正七年）	35
卷一七（雍正七年～雍正八年）	87
卷一八（雍正九年～雍正一〇年）	135
卷一九（雍正一〇年）	169
卷二〇（雍正一一年～雍正一二年）	201
卷二一（雍正一四年「乾隆元年」～乾隆二年）	237
卷二二（乾隆二年～乾隆三年）	273
卷二三（乾隆四年）	313
卷二四（乾隆五年～乾隆六年）	339
卷二五（乾隆七年）	389
卷二六（乾隆七年～乾隆八年）	427
卷二七（乾隆九年～乾隆一〇年）	459
卷二八（乾隆一一年～乾隆一二年）	485
卷二九（乾隆一三年）	531
卷三〇（乾隆一四年）	559
歴代寶案 第二集 第三・四冊 解説（神田信夫）	591

凡例

一、この校訂本『歴代寶案』は、同書第二集の現存する諸異本を校合し、第三冊に目録上・下と巻一〜一四、第四冊に巻二五〜三〇を収録したものである。

この凡例は、第三冊、第四冊に適用する。

一、校合に使用した諸異本とその略称は次のようである。

鎌倉芳太郎氏影印本

鎌

旧沖縄県立図書館写本

県

台湾大学蔵写本

台

同 目録乾坤

乾坤

鄭良弼写本

鄭

これら諸本（鄭良弼写本を除く）の存巻表は凡例の次に表示する。

一、校訂の底本は、原則として次のとおりである。

鎌倉影印本

巻一・五・六・七・八・一二・一七・一九

旧沖縄県立図書館写本

巻二・一一・一五・一六・一八・二三・二六・二七・二八・

三〇

台湾大学蔵写本

目録（上・下）・巻三・四・九・一〇・一三・一四・二〇・

二一・二二・二四・二五・二九

いずれの場合も二丁を一ページ（上下二段組）に収める活字本とした。

また目録には、台湾大学蔵写本に、上・下本（収録全二〇〇巻）と

乾・坤本（収録全一二五巻）がある。この校訂本では、二〇〇巻全巻

を収録する上・下本を底本とした。乾・坤本については、第十五冊に

採録する予定である。

なお、巻二の前半部分〇一〜〇八号文書は、底本の旧沖縄県立図書館写本の欠損が甚だしいので、台湾大学蔵写本を底本とした。

一、校合の原則は次のようである。

(1) 底本の体裁をできるだけ保存するため、抬頭・欠字等及び一丁の行数、一行の字数にいたるまで底本に準じた。

(2) 一行の字数は抬頭を含めて十八字である。一行の字数が十八字を越えるものや、また十八字に満たないものは、いずれも字間を調整して行の移動を避け、また空格と区別できるようにした。

(3) 校異は原則として本文の当該文字あるいは底本の虫食・破損などで欠損する文字を示した□の右傍にページごとの注番号をつけ、依拠

した諸本の略称と共に頭注に記す。ただし割注の注番号は当該文字

あるいは□の下に記す。

(4) 対応する文書または記事が、『明清史料』等に含まれる場合は、これを校合に使用し、それぞれの略称を用いて頭注に記す。

明清史料

史料

明清檔案

檔案

清実録

清実

中国第一歴史檔案館蔵軍機処檔案

軍檔

歴代表文集（法政大学沖繩文化研究所蔵）

表文

表集（法政大学沖繩文化研究所蔵）

表集

貢進ニ関スル公文書類全（京都市文学部博物館蔵）

京

(5) 諸本に存する文字の異同でも、明らかな誤字（誤写）は注記を省く。
(6) 底本の虫食・破損などで欠損する文字を諸異本に拠らず推定した場合、
合は頭注に「一カ」とする。

(7) 底本の誤字と推定される場合は、当該文字の右横に注番号を入れ、

頭注に「一ノ誤カ」と注記する。また脱字と推定される場合は、当

該箇所*印をつけ、頭注に「一ヲ脱カ」と注記する。なお、割注
については当該文字の下に*印をつけ、注番号を記す。

(8) 錯簡・欠落・挿入についても、当該箇所に※印をつけ、注記した。

(9) 底本に存する誤字で頻出するものは、一々注記せずに訂正した。例
えば、巳と己・巳、末と未、梢と稍、辨と辨、辨を誤用（混用）す
る類である。

10 目録については、全体の体裁を整えるため、行頭の整理を行なった
箇所がある。なお、割注の字の大きさは、基本的に8ボとするが、
6ボで処理した箇所もある。

一、字体については、原則として正字体に統一した。ただし人名の俗字・
異体字については、底本に拠ったが、同一人物で二種の字体がみられ
る場合は、混同を避けるため、正字体を採用した。

一、各文書の最初に文書番号を付した。二一〇一〇一は第二集第一巻
の第一号文書を示す番号で、以下同様にして二一三〇一七までであ
る。

一、各巻冒頭の巻数・収録年代等の表示は旧沖繩県立図書館写本と台湾
大学蔵写本の内題に基づき、全巻について復元して活字にした（校訂
本第三冊グラビア写真参照）。ただし表示された収録年代で、本文の
収録文書の年代と誤差のあるものについては訂正した。

一、第四冊の本文の後に、第三冊、第四冊についての解説を付録した。

一、本冊の校訂は神田信夫氏が担当し、渡辺修・宮田道昭両氏の協力を
得た。

一、本冊の底本に使用した鎌倉影印本、旧沖繩県立図書館写本、台湾大
学蔵写本を所蔵する沖繩県立芸術大学附属図書・芸術資料館、那覇市
立図書館、台湾大学をはじめ、校合に使用した資料を所蔵する法政大
学沖繩文化研究所、中国第一歴史檔案館等の御協力に対し、深く感謝
の意を表すものである。

一、この校訂本に基づいた訳注本は続いて刊行される。

『歴代寶案』校訂本 第3冊・第4冊存巻表

(第3冊)

巻数	目録上	目録下	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14															
収録年代	至嘉慶一八	起康熙三六	至咸豐一八	起嘉慶一九	至康熙三九	起康熙三六	至康熙四二	起康熙四〇	至康熙四二	起康熙四二	至康熙四七	起康熙四四	至康熙四九	起康熙四八	至康熙五〇	起康熙五二	至康熙五四	起康熙五二	至康熙五四	起康熙五四	至康熙五六	起康熙五七	康熙五八	至康熙六〇	起康熙五八	至康熙六一	起康熙六〇	雍正元年	至雍正三二		
鎌			◎					◎	◎	◎	◎														◎						
県					◎				○					◎		○															
台	◎上 ○乾	◎下 ○坤	○	○	◎	◎	○	○	○	○	◎	◎	○	○	◎	◎															
文書件数			23	15	12	21	16	23	16	18	22	15	21	18	22																32

(第4冊)

巻数	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30																
収録年代	至雍正五	起雍正三	至雍正七	起雍正六	至雍正八	起雍正七	雍正一〇	雍正一〇	至雍正二	起雍正一	至乾隆二	起乾隆一	至乾隆四	起乾隆三	至乾隆二	起乾隆一	至乾隆四	起乾隆三	至乾隆六	起乾隆五	至乾隆七	起乾隆六	至乾隆八	起乾隆七	至乾隆九	起乾隆八	至乾隆二	起乾隆一	至乾隆三	起乾隆二	至乾隆四	起乾隆三
鎌			◎			◎																										
県	◎	◎	○	◎	○				◎			◎	◎	◎																		◎
台	○	○	○	○	○	◎	◎	◎	○	◎	◎	○	○	○	○	◎	◎															○
文書件数	23	24	21	14	16	15	19	25	13	30	20	12	12	25	21	17																

(1) ◎印は底本である。 (2) 県本巻12は1-8号(前2葉部分)文書が欠落している。

(3)